

ママサポーターの三上千尋さん(右から2人目)と中尾加菜子さん(左)



地域で会社で頼り合い

昨年11月21日、盛岡市の三上千尋さん(40)は、知り合いの中尾加菜子さん(37)の娘聖菜さん(7)を市内の商業施設で1時間ほど預かった。三上さんは岩手県在住者として初めて「子育てシェア」のママサポーターとして認定されたばかり。「もっと地域で子育てを頼り合いませんか」。ママサポーターの輪を広げようと奔走している。

「子育てシェア」は、子どもの体調が悪かったり、急な残業が入ったりした時などに顔見知り同士でインターネットを通じ、有料で子どもを預け合う仕組み。「As Mam a(アスママ)」が運営している。三上さんは2014年9月に長男の峻太郎ちゃん(1)を出産。以来、夫の仕事の帰りを待ちながらずっと子ども中心に過ごし、「話すといえはレジの人くらい」。疲れていることすら知らなかった。昨年8月、先輩ママサポーターで横浜に住む中尾さんが、お母さんたちの疲れをほぐす交流会を盛岡市で企画。三上さんは軽い気持ちで参加した。「子育てはもっと頼っていいんですよ」。そう中尾さ

ママサポーター奮闘

働きやすい「環境」を

んに声をかけられ、「驚きでもあり、うれしかった。肩の荷が下りた気がした。

「子どもと女性を応援できるというのも会社の価値」。そうした理念を会社づくりを生かそうとしているのは盛岡市三ツ割の川上塗装工業社長、川上秀郎さん(37)だ。妻で専務の冨華さん(33)と共働きで社員は10人。3歳と生まれたばかりの子の2児の父。一親として急な病気ときには子どもをみたいし、行事に出たい。自分が子どもの学芸会を見たいのに、社員に出るなどは言えない。そう思った。

「社員は家族。その社員の家族はまた家族。働きやすい場をつくってあげたい」。社員で3児の父・小野詩人さん(37)は子どもの急な病気やけがのときは職場に連れて来る。「会社に迷惑をかけるという思いもあるけれど、「保育園や病院にも心配しなくて



花巻市の実家は距離があり、託児を頼んでばかりもいられない。「頼れる人が近くにいればいいなあ」と思っていた。私のように頼りたい人もいるんじゃないか。子どもと一緒に過ごしながら誰かの役に立ちたいと思う、ママサポーターに応募。面接や研修を重ねて認定された。三上さんは、盛岡市や北上市などで「子育てシェア」のチラシを配っている。「頼れる人が近くにいたら、必要としている人に知ってもらいたい」。まずは盛岡市で集まれるママサポーターが10人になるよう目指している。



川上秀郎さん(右から2人目)、冨華さん(右)夫妻と川上塗装工業の社員ら＝盛岡市三ツ割3丁目

行っている」と言ってくれた。パートの佐藤彩美さん(36)は、幼稚園の時間に合わせて午前9時から午後2時半まで働く。幼稚園の父母会の集まりに出席するため、月2回は休みをもらう。部署によっては休みを取りづらかったり、若い社員がそろって子育てに追われるようになったりするかもしれない。だが、川上社長は「会社を描く。は経営者の考え次第」。数十年後は人口も減って塗装の仕事も少なくなるだろう。「でも、日本の企業が働きやすい環境になれば、未来は変わる」。2、3年後、訪れる人が子育ての話をしたり、社員の子どもの面倒もみたりできるショールーム一体型カフェを社内に作りたい。その夢を描く。